こうたい

白家　并一

詞を名とせり

[V. 43]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 43
copy 1
Asian
Japan
Large

2004551302

（宝暦十年の条のつゞき 伝記掲載）
そは此御家大納言さまの御代にはあらで、故侯（ちゝ）のおんつぐ（嗣）
なり給ふ。其御代（みよ）（柏）右清水の後のそこつぎよりこゝろ
ざしくだりやうの心ざしへまゐらせ給ふ。
へそなりのぼり給ふ。一月うちそへて、まいそ
いとまもなくひあり。おくまでしつらひそなへ
さしいとやんごとなきうりもの、小方あまた
あまたをまゐらせ給ふ。いまだ
浦のおほき大尽（おほがた）のれむすめ（娘）、まさご（女）らをもて
かくしつらひ給ふ。或ふみの文（ふみ）そ。お娘（むすめ）ごの
ふるまひをせよそのこゝろをもて浦（うら）人（びと）
つゝしみ（紅梅ノ）ひめ（姫）ごなどゝ、幸月ゐれ（居）ごえさしもも

ぢうりこ海ちぬなあり。此子は故小方の此もしらこと。
二人のこそおりしかれば、さうぐしとて、神仏に
祈(この)まて、今のもしらこそおとこ君ひこりまうけおへる。
古文(霊)の此ことは、女君一所おりすへてまうぞ。い
づれをもおなじごと、故(和楊ノ)ぬしかもしらまへ事を。
をのく此(故小方ノ人之)の人なとも、うりしうとあらぬ心
ぢへうちまぢり、お海ろ〇ぐちきこともいでらる
時ぞあれど、小(桂柱)のさいとまれぐしう。いまめき
ろ人まて、つゝなくとりなし。我此ことざ海ろ
らしかるべきことをも、なぐしかまさらなし。お
なをしおへば、まくかしでめやすりかり。君(和楊ノ)ぐち

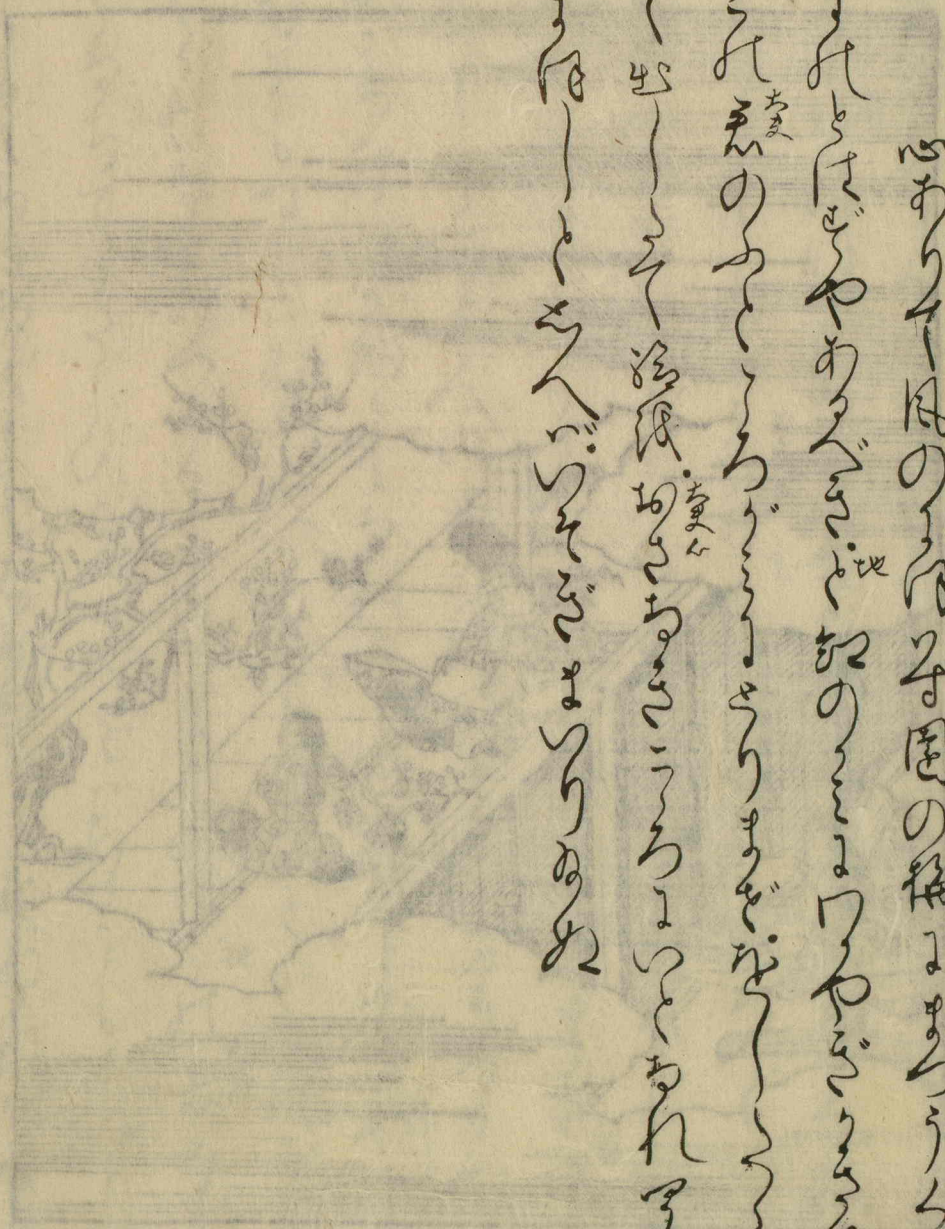
おちじ程にすぎくおとなび給ぬれば此色などを
きそまつり給。七ゝんのしん殿ひろくおほしきに
つくりて南おもてに大納言殿のおほひ君西に中の
君東に宮のれうとすまをなりぬ人り大かたに
うちちかほどは。ちしこやのおもをぬ心ぐるしき
やうなれどこちたくなるのれうしぬおほくなど
して。内々の儀式を様などこゝろよくけたくなど
もてなして。けかひあらまほしうおかす。例のかく
しづき給ふこしありて。つきぐにしたがひけ
ふこし給人おほく。内裏宮より此気色あれど。内にハ
中宮おりしますいかぢりの人は。彼此けかひに

なしびゆゑん。さりとてせひとうひげきんもうひ
なるべし。其実は右のおほいとの女は。ならぶ
人なげきてさふらひなふは。さしろひまくなれど。
されこいひてやはひとまゝさんとせふ。女子を
実づくまさんでは。なまれかいうはあらんと
そしたちて。（其実へ）まいらきありなふ。十七八（紅梅ノ嫡女之）のほどにて。
うけくしう白ひおほうる心ちしなへり。中の君を
うちすゞいておてまなまめしう。すゝしうさ海は
まさりておしうおりすれど。たゞ人にてはあらう
しう。こせまうきはさ海を。（白）兵ゆのこや君さも
そしらうばなどぞ。そしらう。これ（桂枝ノ脇大史）あぶゝとうち

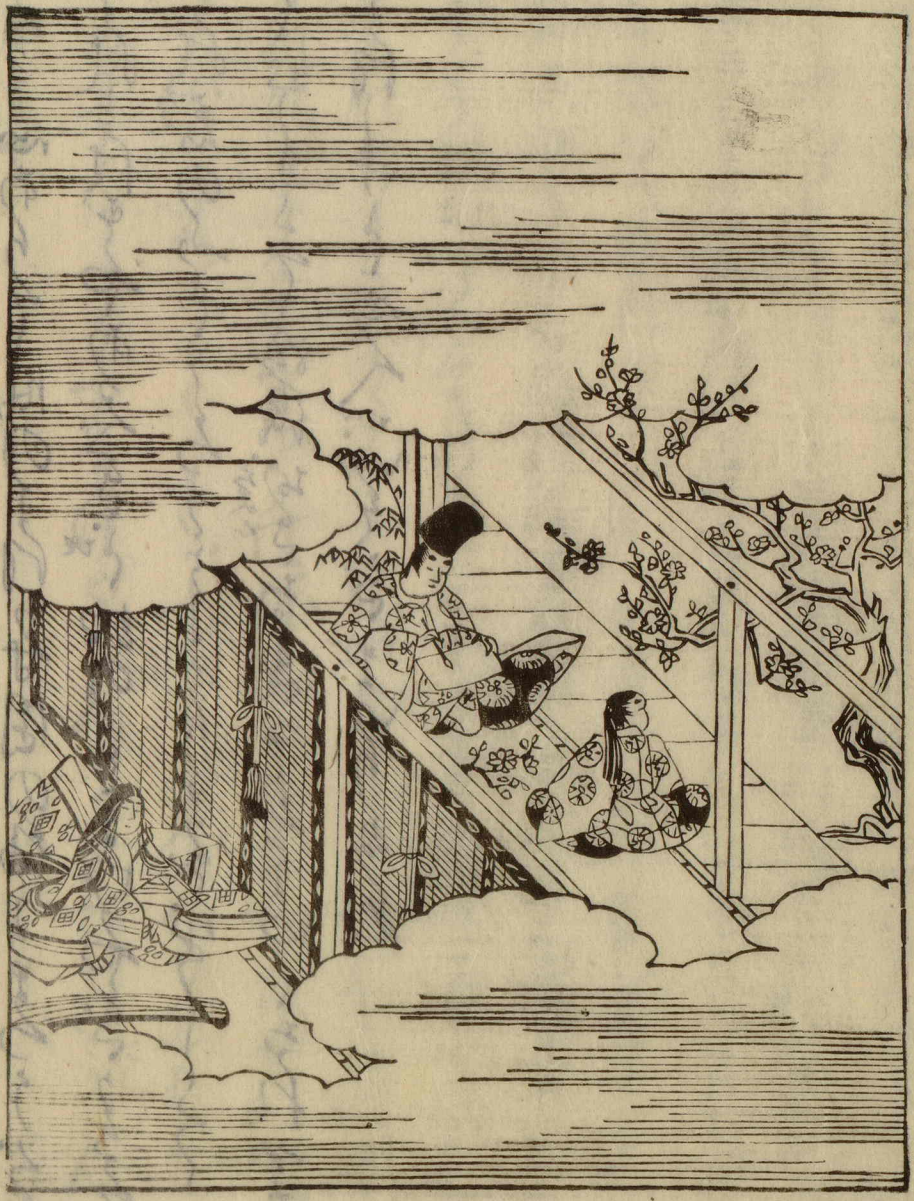
ましひめそび給けり。抱もぢ（文ノ仮方ノ事）と世れつゝ。ちゝぎし
めて。母（桂柱）小方にぐるまさやうにはおさくさしむかひ
なり給ひず。かたまなりまでもてなし給ひれり。
心ぢへけそひのむまれたる女なしず。おいぞやう
つきのへることもたく。人よりすぐれのへり。かくうち（嫡女ノ事）
まいりやうやと。紙（紅梅ノ姫ぎうをあつらへと云へ）ぐ女をのこ。むいそぐやう
ちかも。心（文ノ仮方ノ事）ぐるしなど。見して。さらべ（紅梅詞）かしんさ女
そしさぐめてののへおなじしくこそ。いかう
まつしめと。母（桂柱）恵にも。いかし給かれど。さしまさやうの
せづきたる女。むしけべきにもあらぬ（文ノ方ノ）かしこさ
なれば。なかくなしんことは。ろろぐるしかるべし。

れすくこゝまゝをて。せまあしんこゝりハこゝて
まつしん。後ぞ衣まうしろめるゝれど。よをそむく
るゝてもなれづるゝへ。しくへまあらけきと
なくて。すぐし給ハなんなど。うちなきて。れ心ぢをの
せかやうなることをぞきこえ給。いづれも（和楊心）ほりぞ
おやがりのへど。れるゝちをこぞやとゆかしうおぼ
して。（討）かれ給こそころうかれと恨こえて。（心）人もれず。
こゝ給ぬべしやとのぞきありきのへど。（実伝方）こえてる
そばをぐまえゝなり給ひず。うへ（桂柱）おりをぬけどハこち
かたりて。氣りくべき氏。うとくもくおぼしまゝる
れかしきなれバ。こゝろうくこそなどきこえて。（地）こすれ

まへにねぬへば、れいし人などほのかにみえて給はこ
ゑけまひなどあてにおしう。さ雨かくち却もひ
やられて、おそれに見ゆか人のれありさ雨なり。是が
れひめ君くち紙。人にせさしじとゑせごれど、この君に
えしもまさしずやあらん。かくれバこそ世中ひろさ
うちハつづらりしけれ。ぐぐひあしじと却ふり。
まさりかたもせのづくしありぬべかめりなど。いとぐ
いづしうさひさえしぬふ。月ごろなりとなく
物さはがしき行に。れ琴の音をぐにうけ給はしで。
ひさしく女侍にかり。西の方に侍りひといびきし紙
そろにいれて侍り。さもまゐびとりのべくや見て



心(和揚)ありて風のまほ守園(その)の梅にまろうぐひ
すれとはぎやあるべきと(地)知のこゝにつやぎうきて
これ(大夏)君のふところがこゝにさりまぎなしこゝこ
て出しこそ給紙(大夏ん)おさおさこゝろにいとあれ寄
まほしとさへいそぎまいりぬぬ



ことぞかしちどもれによそへてもまづうけ字を給。
定(地)のけうくは抱見しきる程にわびまさりのへれば、ちゝ
ごともこゝきり。きくとゞめ給ものはわしほど。人(定ノ仲方ム)に
そし世づきたんをさ海にさしまと見しもなれ
たり。よれ(地)人も時によろ心ありてにや。さし(和極ノ高明を云)むかひ
たるけうぐには心をつくし字をよび。今めしき
ことおほかれど。こゝろ(定ノ仲方)は第につけ。抱きめやかり
ひきいりのへる紙。定(白ム)はけふさい(夫妻)のうたりきくい
こへのて。ふういうでとおほほし。ぬまさり。ことは(地)
志(大夫)をつゐにまつりしよを給つ。志のびやかにけ文
あれど。大納言(和極)の志ふく心うけきてのて。さも(白ノ)志

たちての給ことあらばとかしきたり心まうかし
給をうるに（桂柱ノ）いとおしうひさうぐへてかくさひよう
べくもあらぬかたにしもなげの玄の葉をつくし
給かひなげなることし小方も見ての給ちうなさは
ありなどもなければまなじの此心そひて おもほし
やむべくもあらず なまかは人の此ありさ夜などかは
さてもこまらまほしうおひさ紀とをくなどはこそ
させなふまなど小方おもほしよるかはぐあれど
いといたう哀めさなてかかひ給悲び所おほく
八の宮の姫君にもはこうろざしあさかしぞいと
たげうまうでありさ給これもしげなさはこうろの

69038
6AP78